

保育者養成における生と死の授業

尾 上 明 子
中 根 淳 子
村 田 康 常

I. 緒 言

いったい私たち人間は、生きているものがすべていつか死ぬということ、そして生き返らないということを知っているのだろうか。古くはピアジェの認識論の枠組みの中で死の概念成熟に視点をおいたマリア・ナギーの研究があり、近年ではダナ・カストロやわが国でも岡田や「兵庫・生と死を考える会」などによって多くの研究がなされている¹⁾。「兵庫・生と死を考える会」の調査は、兵庫県内の4~9歳の児童504人に動植物や無生物に対する「生命」としての認識、生命の有限性の認識、死の絶対性についての認識について聞き取り調査を行ったものである²⁾。これまでの多くの調査からは、生命の有限性の認識能力の始まりは9歳頃とされていたが、「兵庫・生と死を考える会」では7歳頃であるという結果が出ている。(しかし、7歳頃に確固とした概念ができ上がるのではなく、その後も揺れがあり、特に両親の死の絶対性については岡田の調査同様遅れが見られている。)

我々はこれらの結果から、幼児期の重要性を再確認した。つまり人は、7歳頃までに生きているものはいつか死を迎え、そして生き返ることはないことを知識として獲得するのである。幼児はまさにその過程にあり、人間が死ぬ存在であることを人生のはじめのわずか数年間に急速に学ぶのである。「兵庫・生と死を考える会」の調査では死の概念の成熟には若干の性差が検出されているが、ナギーの報告では性差や宗教、庇護状況、近い親族の死は死の概念の理解に影響を及ぼさないとわれている³⁾。それらに重要な影響を及ぼす要素は、親や教師自身の死に対する考え方や態度であると言われている。いずれの研究においても幼児期の重要性が示唆されおり、文部科学省もすでに

少年犯罪をきっかけに2000年に幼児・児童への早い時期に「いのちの大切さ」の教育を適切にするよう各学校に通達している⁷⁾。

それでは保育者は子どもに「いのちの大切さ」を教育することができるだろうか。死の概念の成熟を支援することができるのだろうか。さらに言うとうと、その方法を保育者養成課程において学んでいるだろうか。筆者らの先行研究のなかに、実習中に学生が遭遇したエピソードを記述したことがある⁸⁾。それは飼っていたおたまじゃくしが死んだときに保育者が「おたまじゃくしは永い眠りに着いた」と子どもに説明したことである。学生は、子どもたちがおたまじゃくしが眠りから覚めたらどうするのか戸惑うのではと疑問に思ったのである。今回も同様に学生から、毛虫を踏みつけている子どもに対し、どのような言葉がけをしてよいかまったくわからなかったという声を聞いた。工藤は若い世代の親や保育者自身に明確ないのちや死についての教育に対する姿勢が欠如していると指摘し、その理由として彼ら自身がそのような教育を受ける機会が乏しかったことをあげている⁹⁾。現時点では保育者養成課程のカリキュラムにはそれらを教育するための特化した科目はないが、幼児期は死の概念形成における重要な時期であるにとらえ、それを支援していく能力を養うための教科が必要であろう。

筆者らは過去2回、保育者養成課程の学生に「生と死を考える試み」を行ってきた^{10,11)}。これまでの試みは90分授業を5回行い、目的は生と死を考える動機付けをし、自らの死生観を養うことであった。今回はプログラムの目的を生と死を通して「いのち」の大切さを学ぶとし、4つの目標(後述)を設定し、各目標に従って授業内容を設定した(表1)。今回は特に前述した幼児期の死の

保育者養成における生と死の授業

表1 生と死を考える授業プログラム

回数	月日 人数	プログラム (著者・出版社等は巻末参照)
1	6/23 17人	〔ねらい〕 ◇ 参加に意欲を持つ。 ◇ 生と死について記述することにより自分自身の考えに気付いたり、振り返ったりする。 ◇ 死について他のメンバーと語るにより体験の違い、考え方の違いに気づく。 ----- 1. 出欠チェック・名札とファイル渡し (5分) 2. オリエンテーション：導入 (5分・お釈迦様の話) 3. 生と死を考える授業の目的・目標解説 (20分・資料配布) 4. 質問紙記述2枚：エントリー理由、死を意識した年齢、小動物の死。(20分) 5. グループワーク① 死を意識した年齢、小動物の死 (移動5分+グループワークの注意+討議30分)
2	6/27 14人	〔ねらい〕 ◇ グループワークで語られた内容の共有をする。 ◇ 自分自身の死について考えることにより、死を意識する。 ◇ また、自分自身の死について考えることにより、生き方の意味を考えるきっかけとする。 ----- 1. 前回のグループワークの振り返り (20分) 2. 質問紙記述：余命6か月と宣告されたら (30分) 3. 絵本の読み聞かせ① (目的は緊張を解きほぐすこと10分) 4. グループワーク② 余命6か月と宣告されたら (30分)
3	7/18 8人 7/21 8人 (1名臨時参加)	〔第3回・第4回のねらい〕 ◇ 子どもの死生観の発達の概略を知る。 ◇ 幼児期における死生観の発達への援助の重要性について知る。 ◇ 援助のひとつの方法として、絵本があることを知る。 ◇ 死生観確立の助けとなる様々な内容の絵本があることを知る。 ◇ メンバーシップを高める。 ----- 1. 子どもの死生観① (30分) ダナ・カストロ『あなたは子どもに「死」を教えられますか?』を中心に解説 (資料配布) 死に対する年齢別の理解度を3歳まで、3歳～5歳、5歳～10歳に分けて解説する。 2. いのちの絵本 (40分) i 教材としての絵本 (パワーポイント・スライド資料配布) 幼児期が死生観を養う重要な時期であることとらえ、それを支援する手がかりとして絵本があることを紹介。子どもの発達・環境やエピソードに合わせて絵本を自然に取り入れることを説明。 ii いのちの絵本の紹介と解説① 3. 絵本の読み聞かせ② (10分) 4. 感想記述 (10分)
4	9/4 9名 (2名施設実習中)	1. 子どもの死生観② (30分) 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会による「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査」の解説。パワーポイント使用。 2. いのちの絵本の紹介と解説② (30分) 3. 絵本の読み聞かせ③ (15分) 4. 感想記述 (15分) 5. 会食 (50分)

5	9/4 8名	〔ねらい〕 ◇ 長年、教会の胎児教室に関わってきた人の話を聞き、死生観を深めることができる。 1. 畑野寿子先生講演 (75分) 胎児クラス、死産を通して生き方が変わった夫婦の話、咽頭ガンの青年とのかかわりなど、「死をつき抜けて続いている永遠の命」について語る。 2. 感想記述 (15分)
6	9/19 10人	〔ねらい〕 ◇ 将来保育現場に立つものとして、具体的な取り組みの事例を知る。 ◇ これまでの資料や事例を基にグループで取り組みを考えてまとめ、発表する。 1. 保育現場に立つものとして 一実例報告から (30分) 2. グループワーク・発表 (導入も含め 55分) 「保育園の園庭で、子どもたちがアリを踏みつけている」という実際に実習生として遭遇した場面を再度グループで考えてみる。今なら子どもたちにどのような対応ができるか考える。これまでの資料を参考にしてよいことを伝える。教材として絵本を使ってもよいことにする。見本として絵本を用意。 3. グループワーク講評 (5分)
7	9/26 20人	〔ねらい〕 ◇ 入院中の子どもたちの心の交流、友人の死、闘病などから子どもの死生観、子どもの生きる力、いのちについて考える。 1. VTR:『子ども 輝け命』—小さな勇士たち 小児病棟ふれあい日記— 2004年 (50分) 2. VTR 感想の感想記述 (30分) 3. 聖路加国際病院副院長細谷亮太氏の著書について紹介 (10分)
8	10/3 22人 1名実習 中、臨時 参加4名	〔ねらい〕 ◇ 小児ガンで娘を失った父親の話聞くことにより、死を見つめることが生きることにつながることに気づく。 ◇ 生き抜くこと、支えあうこと、感謝することなどについて考え、自分自身の命を大切にすることに気づく。 1. 死別体験者、鈴木中人氏の講演 (75分) 2. 講演感想および授業全体への感想記述 (15分)
9	10/6 8人	〔ねらい〕 ◇ プログラム全体を振り返り、自己の死生観の変化をまとめる。 質問紙自由記述1枚。(資料 プログラム詳細) : 死生観の変化。保育者となったときに役立つこと。(40分)

概念形成に関わる保育者の役割への気づきと、支援のひとつの方法として生と死に関連する絵本の使い方の説明や絵本の紹介、読み聞かせなどに重点を置いて行った。ここで、プログラムの概要を紹介し、参加した学生たちの意見や感想を元に今回の試み(第5回までの試み)の振り返りをしたい。

II. 方法

1. 生と死を考える授業対象者

本学保育科2年生全員に研究主旨・プログラム

をプレゼンテーションし、自ら応募した学生20名(男子2名、女子18名)。

2. 授業の方法

生と死を考える授業の目的、目標は次のように設定した。

目的

生と死を考えることを通して「いのち」の大切さを学ぶ。

目 標

1. 自分自身の死、大切な人の死を考えることによって、生のかげがえのなさに気づく。
2. 生と死にかかわってきた人たちの講演を聞き、「いのち」の重みを考える。
3. 日々の保育は、こどものいのちに直接かかわる営みであるという自覚を持つ。
4. 保育者として、子どもたちに「いのち」の大切さを伝える役割があることを自覚する。

上記の目的・目標に沿って、プログラムを考案し、第5回（3回目は時間割の都合上、同じ授業を2回実施）まで実施した。プログラムは当初前期中に10回開催する予定だったが、過密な時間割の中で4クラスにまたがる学生の空き時間を確保することに困難を極め、定期的かつ集中して開催することができなかった。前期は3回のみで開催となり、2回は夏季休暇中に実施、残りは後期開催となった。

それぞれの目標に到達すべく、プログラムの内容は解説のほかに、記述やグループワークを導入した。記述することは、自分の考えをまとめることができ、それによって自分の価値観を冷静に批判することができるため取り入れた¹²⁾。また、さらにグループワークをすることにより、体験や考え方の違いに気づき、それによって自分自身を振り返ることが可能となるため、記述したものを共有するための時間を設けた。グループワーク前には、傾聴することや批判をしないことなどの注意を行った。

また目標2・3を受けて、教会学校教師で胎児教室として100人以上の胎児に語りかけをしたり、死刑囚やがん末期患者と関わっている畑野寿子氏を招き、死をつきぬけて続く永遠のいのちを主要なテーマとして講演をしていただいた。さらに小児ガンで子どもを失った鈴木中人氏に講演を依頼し、「死」は悲しいものではあるが、それだけではなく生きたいのちが受け継がれることを語っていただいた。各々の講演により将来の保育者として自分が日々かかわる子どものいのちの重みを実

感してもらうことをもうひとつのねらいとした。

主に目標4に到達するためのプログラムとして、子どもの死生観の発達をダナ・カストロ「あなたは子どもに『死』を教えられますか？」¹³⁾ および「兵庫・生と死を考える会『生と死の教育』研究会」による「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査」に基づいて解説した。資料を配布したり、説明が長くなる箇所などは、図を多く入れたパワーポイントを使用して理解を助けるように工夫した。また、これまでの筆者らの研究から絵本をプログラムの教材とする方法を採用した¹⁴⁾。保育科の学生にとって、絵本はなじみ深いものであるばかりでなく、近年死をテーマにした良質のものが数多く出版されているからである。第3回セッションでは、将来保育者として子どもに生と死を教える際は、絵本がひとつの教材となりうること、数多く出ている死に関する絵本を吟味せずに使うのではなく、子どもの死生観の発達に合わせて使用することなどをパワーポイントで解説した。さらに、生と死に関する絵本のリスト（42冊掲載）とリーフレット「絵本に見るいのちと死」^①を配布した（図1）。本プログラムで紹介や読み聞かせをした絵本は20冊で、表2のカテゴリーに従って解説した。絵本の読み聞かせは、教員の近くに学生を集めた上で実演した。

また、応募してきたメンバーがプログラムへの



図1 配布リーフレット

① 愛知県「命を大切にすることを育む教育推進事業」に名古屋柳城短期大学附属柳城幼稚園が採択され、リーフレット「絵本に見る いのちと死」として筆者らが作成。いのちをテーマにした8冊の絵本を紹介。

表 2 プログラムで使用した絵本

カテゴリーと主旨	タイトル名	ポイント
①いのち（誕生・愛・信頼）：幼児期には生きている実感と喜びを感じさせることが重要。特に幼い子どもたちには、母親や保護者に抱かれること、安心できる場所が必要である。	ぎゅっ	子どもが一番安心できる場所。抱きしめられることにより、生きている実感・喜びを感じる。
	ママだいすき	母親といっしょにいる喜び。
	あやちゃんのうまれた日	家族のなかで待たれて生まれてきたことを知る。
②自然界（生成と消滅）について：自然界の生成と消滅を気づかせる、そこから、全てが消滅するのではないこと、死が死で終わらないこと、いのちが次のいのちへ繋がっていくことを知る。	ののきき～野日記～	いのちの繋がりが、死は死で終わらない。
	さよなら トンボ	霜の降りたトンボ、いのちの終わりの死。
	葉っぱのフレディ	大自然の不思議、いのちの旅。
	おおきな木のおくりもの	一本の木を廻るいのちの循環。
③老化・死について：子どもたちが生的一部分に老化があること、すなわち力の減退や病気、死があることを知ることは大切であり、それらは子どもたちの視野を大きく広げてくれる。	ミッフィーのおばあちゃん	おばあちゃんの死、悲しみと追悼。
	わすれられないおくりもの	亡くなったものが残したものの、その感謝。
	ずーっと ずっと だいすきだよ	ベットとのかかわり、心を伝えること。
	さよなら エルマおばあさん	写真による記録、死を受容すること、愛すること。
	だいじょうぶだよ、ゾウさん	死にゆくものと共にいること、別れの悲しさ。
④親しい人たちの死に直面する子ども：子どもの死生観を知る手がかりとなるもの、また、死がどのようなものかを共に考えることを目的としたもの。	「さよなら」っていわせて	死に行く子どもとともに考える生と死のワークブック。
	どこにいるの、おじいちゃん	幼い子どもの目線で見た死。
⑤自分自身の死に直面する子ども。	レアの星 友だちの死	友だちが死ぬということ。
	ペッレと二枚のてぶくろ	兄弟の死に直面し、子どもの「死んでからどうなるの？」という疑問に答える。
	真昼の星	闘病から死までの子どもの日記・手紙から子どもが信仰を持つこと。
	ダギーへの手紙	子どもの疑問「なぜ、死ななければならぬの？」に E・キューブラー・ロスが答える。
	ぼくのいのち	小児科医から白血病の子どもへのいのちのメッセージ。
⑥死にゆく人とのかかわり：愛する者との別れについて考えさせるもの。	ふたばあちゃん	死を準備する祖母と付き添う孫、愛する者との別れ。

参加意識を強く持てるよう、首から提げるタイプの名札と、資料を入れるためのファイルをあらかじめ配布した¹⁵⁾。また、連絡は掲示だけでなく、メールも活用した。さらに、緊張をほぐすために、夏季休暇中に行われた第 4 回、5 回は間に会食を入れた。

Ⅲ. 結果

1. 第 1 回結果

第 1 回の授業では、オリエンテーション（導入）とこの試み全体の目的・目標の解説を行ったのち、

20 分間の記述時間を設け、2 枚の質問紙を順番に配布し、記述させた。その後、3 つのグループに分かれて、2 枚目の質問紙の質問項目を中心に自由に話し合う機会を持った。

1) 質問紙 1 (学生の参加動機・理由の自由記述) の結果

「質問：あなたがこの試みに参加する動機・理由は何ですか」

学生の記述した量は多い学生でも 150 字ほどであった。受講理由の中には教員に紹介されたため、

あるいは友人が参加すると言っていたのでという自分自身の目的を明確には記述しない者、逆にきっぱりと特に理由はないが参加したと述べた者がそれぞれ1名ずついた。しかし、参加へのきっかけとして、最近起きた親族や友人の死、あるいは事故をあげ、この試みに興味を持ち、死について考えたいと思ったと述べた者も4名いた。また、保育士になったとき子どもに生と死をどのように伝えるかを学びたいと述べた者が5名いた。このうちの1名は、実習時に蟻を踏んでいる子どもや花をちぎっている子どもへの対応がわからなかった経験がきっかけであると記述していた。また、記述の中に「保育士」「こども」などのキーワードは含まれていなかったが、これまで生と死について深く考えたことがなかったのでこの機会に考えてみたい、あるいは死について折に触れて考えてきたが、よりいっそう考えを深めてみたい、他の人の意見を聞いてみたい、などと述べた者が6名であった。また、当日は欠席で、後日質問紙に回答を記述して提出した学生は、生と死は生きているものすべてに切り離せない問題であり、この機会に正面から見つめてみたい、またこの試みを通じて感じたことを家族や友人に伝えたいというかなり明確な目的を記述していた。

2) 質問紙2(小動物の死、死を意識した年齢に関する自由記述)の結果

① 質問1「あなたはペットや小動物などの死を経験したことがありますか。また、そのときどのように感じましたか。」

すべての学生が小動物の死を経験していた。小動物は、ペットとして飼っていた動物ではない場合もあるが、ダンゴ虫、毛虫、金魚、鳥、ハムスター、犬などであった。死んだダンゴ虫の外観に嫌悪を感じた者もいれば、金魚が死んでも何も感じなかったという者、あるいはかわいがっていた金魚の死を悼んでいる者もいた。ほとんどは「ショックだった」「悲しかった」「驚いた」「怖かった」「辛かった」などの情緒的な反応のみを記述していた。しかし、中にはそれらの体験から、小動物でもかけがえのない生を生きているという実感を持ったことやペットの幸福について家族と話し合っていると述べた者、ペットの生死を左右するのは

人間であると疑問を感じ悩んだことなどを記述した者がいたがいずれも少数であった。

② 質問2「あなたが、はじめて死を意識したのはいつ頃で何がきっかけでしたか。また、そのときどんなことを感じましたか。」

初めて死を意識した時期は小学校就学前5名、小学校低学年5名、小学校の頃(学年不明)2名、小学校高学年3名、中学校1名、高校3名であった。きっかけとなったのは祖父母(曾祖母)の死が14名と最も多かったが、複数回答した者が多く、親戚の死2名のほか、自分自身あるいは友人の事故、先輩や同級生の死、入院中に同じ病棟の子どもの死の経験が死を意識するきっかけとなった者がそれぞれ1名であった。また、阪神淡路大震災、殺人の報道、ペットの死やカマキリがバッタを食べたことがきっかけとなった者も各々1名ずつあった。そのときの気持ちとしては「悲しい」「怖い」「ショック」という反応が多かったが、他に棺の中の遺体を見て「元気だった人がなぜ」と疑問を感じたり「認めたくなかった」「信じられない」「信じたくない」「本当にもういないのか」という現実を受け止めかねる気持ちを述べた者、死後「どこへ行くのか」と死後の世界について考えた者もいた。5歳のときに祖父の遺骨を見た学生は、「死は人がいなくなってしまうことと感じた」と述べ、小学校2年のときに祖父を失った学生は「もう会えない」という気持ちをもったと述べ、死の絶対性を意識したことに関する記述が見られる。祖父がガンで亡くなっていく様子を見て17歳で死を強く意識したと述べた学生は、年齢的に成熟していたためか、「どんなに健康でも死が近くにあり、いつかは誰もが死ぬ」という自らの死生観について記述している。

2. 第2回結果

第2回の授業では、前回のグループワークを振り返り、各グループで話し合われたことを全員が共有する時間をもったのち、新しいセッションに入った。次の質問紙を全員に配り、口頭でこの日のセッションの説明を行った。

① 質問：もしあと半年の命しかなかったら、残

された時間をどのように過ごしたいですか。
(ガンなどの不治の病を想定します。落ち着いてじっくり考えてから書いてください。)

質問にすぐには答えず、落ち着いて考えて書くようにという指示は、口頭でも重ねて行った。質問紙に記述したのち、前回と同様に3つのグループに分かれて話し合いの場を持った。

記述およびグループでの話し合いの内容から、学生たちの回答は、およそ6つのタイプに分けることができる。

- ① 最も多かったのが、家族や友人などの親しい人と過ごす時間をもつという回答だった。しかし、その時間の過ごし方については、入院・治療はせず家でゆっくりと過ごす、国内外を旅行する、普段どおり学校に通うなど、多様であった。これまでに会った人たちや、なかなか会えない人たちにもう一度会いに行く、自分と自分の大切な人だけのために残りの時間を生きたいという回答もあった。普通に過ごすと答えた学生の中には、「今が幸せなので、このままのときを過ごし、大切な友人との時間をもちたい」と述べた者もいた。また、「まだ未成年なので、やりたいことができていない気がする」など、成人を迎えず死んでいくという無念さに言及した者も複数いた。
- ② 「今までにできなかったことをする」、「好きなことをする」と答えた者が半数以上いた。具体的に何をするかについては、行ったことのない土地への旅行が最も多く、次いで、食事(好きなものを食べる)、買い物(服など)が多く、その他、クリスマスや七夕などのイベントを楽しむ、ライブに行く、喫煙してみるといった回答があった。また、残された半年について月ごとの計画を立て、海外の貧困地域でボランティア組織を作り、国内で施設と保育の複合施設を作ると書いた者もいた。具体的な内容には特に言及しないで、ただ「好きなことをしたい」、あるいは「自分にしかできないことを探したい」、「やりたいことはたくさんあるが、(具体的には)出てこない」と答えた者たちもいた。
- ③ 思い出を作る、生きた証を残すという回答が出された。例えば、事業を興す、あるいはボランティア組織を作ると書いた学生たちは、自分

の生きた証を残したいと述べていた。家族や友人と過ごすと答えた者のなかにも、思い出を写真に収める、自分が生きていたということを残したい、と述べる者が多かった。

- ④ 両親や家族、友人・知人など周囲の人への感謝の気持ちを伝えたいという回答は、参加者の3分の1であった。「私に関わった人に感謝の気持ちを込めて充実した半年を過ごす」、「両親への感謝を伝える手紙を残す」(2名)、「両親と旅行し、楽しい時間の中でお礼を言って感謝の気持ちを伝える」といった回答があった。これらの発言を受けて、教員が「お礼や感謝を伝えたいという人はいますか」と言葉をかけると、他の学生からも「たくさんいる」「両親に伝えたい」などの答えがあった。
- ⑤ 周囲の人に心配や負担をかけたくないという回答も多かった。例えば、「周りの人に心配や迷負担をかけすぎないようにしたい」、「家族には気を使わずにいつもどおり接して欲しい」など、最後の半年を一緒に過ごす周囲の人への配慮や、あるいは、「悲しんでほしいけど、負担になりたくない」、「みんなが泣いたら自分も悲しい」、「死んでから人に迷惑をかけたくない」、「なぜ死んだのと悲しまれるのではなく、感謝されるような最期のときを過ごしたい」など、死後に遺された人たちの悲嘆や苦痛に対する配慮などの言葉があった。また、「両親以外には余命の短いことを知らせたくない」、「受け止められる相手なら、友人にも半年の命と伝える」など、不治の病であることを伝えず心配をかけないようにするという回答や、「周囲の人には心配して悲しくふさぎこんでほしくないので、自分自身が明るく最期を迎えたい」という回答もあった。

ある学生は、死を迎える直前に失踪し、家族や友人たちには「自分がどこかで生きていると思っていてほしい」と答えた。祖父の死後の処置を見たときの体験が記憶にあって、そのために「(自分の死体の)処置をしてもらって、死んだ後までも世話をかけるのが嫌になった」と述べていた。「お金も世話も人の迷惑もかけたくない」というその学生が、逆に「どうして見守られて死にたいのか」と問いかけると、他の

学生が「忘れられたくないから」、「ずっと死んだかどうか分からないよりは、遣される人たちも看取った方が安心すると思う」と答えた。最初の学生は「そう思うと見守られたい気もする」と述べた。

- ⑥ 少数ではあるが、苦痛のないように、眠っている間に死にたいという回答があった。

3. 第3・4回結果

1) 子どもの死生観

第3・4回は、子どもの死生観の概略を知り、幼児期における死生観の発達への援助の重要性を知ることを目的としてセッションを持った。第3回では、ダナ・カストロ『あなたは子どもに「死」を教えられますか?』を中心とした資料を配布し解説した¹⁶⁾。続いて第4回は、「兵庫・生と死を考える会『生と死の教育』研究会」による「幼児・児童の死生観についての発達段階に関する調査」の解説をパワーポイントを用いて行った¹⁷⁾。その結果、第3回では次のような感想が見られた。まず、子どもの死生観の発達を知ることに関するものとして、学生自身の幼少時の経験と重ね合わせ、子どもの死生観の発達を知るにより、疑問に思っていたこと（祖父が亡くなったとき、なぜみんな悲しんでいるのだろう、なぜ骨になるんだろうなど）が解消された、子どもに死を理解してもらうことは大変だが、それでも保育者は伝えなければならないと思った、実習中、祖父が亡くなって休んでいる園児と妹が生まれる園児の両方に遭遇し、担当の先生の対応を見ておとなの方が死を避けているように思った、と実習での経験と結びつけ述べている者がいた。次に子どもの死生観の発達への援助に関するものは、シントラーの理念に納得し、子どもたちに「死」を教えるとき、「死」から始めるのではなく「生きる」ということから始めたい、生死は言葉で説明していく事柄ではなく、動植物を育てる・高齢者との関わり・絵本との関わりの中でじわじわと感じていくものと分かった、子どもに死についてあいまいに答えない方がいいということを学んだ、などがあった。また、子どもが母親を求める際に泣くことも、その時見放されたら生きていけないからではないかとの気づきなど、子どもを見る視点の変化が見ら

れた学生がいた。この学生は、「その時の子どもが思ったことをそっと受けとめ徐々に教えていったり、感じるができるような保育をしたい」と具体的な援助を考えている。以上のような気づきとともに、生と死を伝えていく難しさを指摘し、間違った言葉がけをするかもしれないこと、一つ一つの言葉を考えて伝えていかなければならないと身にしみて感じ、保育者だけが伝えようとしてもだめで、親と協力していくことが大切と分かったとする意見が得られた。

第4回は、次のようにまとめることができる。子どもの死生観の認識は、思っていた以上に早く、7歳がキーポイントであることを知ったという反応がほとんどであった。その理由として、テレビからの情報を上げる学生がいた。また、死は大人にとっても不可解なものなので、子どもであれば当然戸惑いがあるのではないかという意見や、動いているものは生命であるという認識が4歳児にも明確にあるということに驚いているという感想があった。これらの認識の上で、7歳より以前に生命に対する正しい教育をしていくことやゆっくり時間をかけて行っていく必要があると思うと述べている者がいた。調査結果から女子の死の絶対性への意識が8歳で低下するのはなぜかという疑問を持った者もいる。2回の講義を通して、子どもの死生観について初めて知識として知ったという者がほとんどであったこと、また、知ったことにより幼児期に生と死の教育をなんらかの形でしていくことの必要性を感じたようである。

2) 絵本の紹介と読み聞かせ

3・4回のセッション、絵本紹介の後、以下の2冊の絵本の読み聞かせを行った。

① 『ずーっと ずっと だいすきだよ』（ハンス・ウィルヘルム、評論社、1988年）

② 『ぎゅっ』（ジェズ・オールバラ作絵、徳間書店、2000年）

①については、男の子のペットに対する愛情や「大好き」という気持ちを言葉にして出すことの大切さを感じた、男の子が犬の死を受けとめることにより、また新しい一歩を進む過程が「じん」と心に響いた、子どもたちに死を伝える参考になり、自分をもっと考えなければならないと思ったなどの

本から受けた反応、及び自分の知らなかった新しい絵本に出合えたことにより、子どもや家族、大切な人に読んであげたいなど本の今後の利用について触れているものがあった。②については、言葉は少なくとも、絵の感じを読み取ってどんなことを伝えたいかよく分かったので子どもたちに読んであげたい、素直な作品で何回でも読みたくなる、必ずしも死というテーマでなくても、生きている命を大切にしたり、愛されたりする内容でもいのちの大切さは伝わるのだと思ったなどがあった。

2 回にわたる絵本の紹介と読み聞かせの感想は、絵本の紹介に関すること、今後の利用に関すること、読み聞かせの感想に関することの 3 つに分けられる。まず、絵本の紹介に関しては、多くの知らない本に出合ったことがよかった、授業を受けて実習で絵本を選ぶとき季節に合ったものを選んでいたが新しい視点を学んだ、絵本からも子どもが持つ「死」についての不思議・疑問が読み取れ興味深かった、「のにつき」は、文字が使ってないと思えないほど心に伝わってくるものがあった、重々しいが温かみのある作品ばかり、子どもに「死」を教えるときのヒントになる気がしたというものであった。今後の利用については、絵本一つ一つに伝えたいことがあり、時と場合によって子どもに読み聞かせたい、リストに載っている本をもう一度見直し自分でも学んでいきたい、子どもに読み聞かせの機会をぜひ作りたい、自分でも時間を見つけ読み返し、「死」と「生」について伝えていくことができたなら良いと思う、一つ一つの絵本の特徴や内容を把握し、その子の発達にあったものを読んであげたい、幼稚園の頃から、死について正確に伝えていくことが大切になってくると感じたので、その伝える手段として絵本を上手に使い、自分の伝えたい気持ちを子どもたちに知ってもらえたらなどがあった。読み聞かせの感想は、自分自身の死についての出来事を重ね合わせて見ることができ、心穏やかになれた、すばらしかった、言葉だけでなく、絵を交えて生と死を伝えるということにより、子どもたちに受け入れやすくなると思った、最後に絵本を読んでもらいとても感動したというものであった。

4. 第 5 回 (講演) 結果

1) 畑野寿子さんの講演要旨

私は、かつて幼児教育を学んだが戦時中に勤めるはずの幼稚園が軍需工場になった。これから、どうして生きていこうと思ったとき、神さまからひとつの幻を頂いた。それは、これからどんな人生が待ち受けようとも、あなたは自分の子どもだけのお母さんにならないようにということ。それ以来 60 年以上、多くの子どもたちや人々との出会いがあった。

生と死は、自分の意志を越えた出来事。自分の意志で生まれて来た者は誰もいない。だから、いのちは与えられたもの。しかし、最近、いのちを自分の意志でコントロールしようとする人々が増えてきた。その中には、母体保護法によって、おびたしい胎児が殺されている事実がある。聖書には、胎児という言葉が 47 回も出てくる。(エレミヤ書、ルカによる福音書など)

胎児は、医学の進歩によってすばらしい能力の持ち主であることが分かってきた。胎児は一人のりっぱな人格を持つ存在である。18 年前から、この胎児に向き合うということをはじめた。(胎児の能力の例) この活動にカンガルークラスという名称が与えられた。2006 年 7 月に生まれて来た赤ちゃんの例。生まれてすぐに亡くなった赤ちゃんの両親の例。女子刑務所で、もう一度生まれたいという女性は、今、カンガルークラスに入ってテープ(畑野さん作成)を聴いている。神さまによって新しいいのちが与えられる。咽頭ガンの青年との出会い。この青年は、登校拒否・家庭内暴力・人間不信の塊。両親の話「この子、さえないければ」という言葉を聞いてしまった。この言葉は、決して言うてはいけないこと。しかし、この青年は、神さまのいのちに触れ両親と和解した。

2) 講演の振り返り

感想は、①いのちの尊厳について考えたというものと②先生自身の生き方・姿勢から考えたものと大きく分けることができた。まず、①については次のようなものがあった。一番心に残ったことはいのちの尊さだった。人間は偶然生まれてきたのではなく、必然的に生まれてきた。子どもの命は、生まれる前から始まっているので子どもたちに命の大きさ、大切さについて伝えることが未来につながるという。子どもから死を遠ざげないこと、私たちは、与えられた命をある限り全うし、考えていくべきだと思った。正直、「生きている者はやがて死ぬ」それだけのことしか考えていなかったがこの講義を受け、新たな考えが生まれた。神様に対して「どうしてあの人の命は、こんなに

も短いのですか」と問いたいこともあるが若くして病や事故に直面した人の死は、私たちにたくさんメッセージを与えてくれている。一つ一つの命を預かっていることを忘れず、子どもと関わっていききたい。②については、次のようであった。生きることに理由はなく、何のために生きているのか分からないと思うことあったが、畑野先生のお話を聞いてその気持ちは吹っ飛び、一生懸命生きることが大切なんだと思った。一番心に残っているのは、「私が死んだ後の顔を子どもにも見せて、冷たくなっていることを触れさせて分からせてあげてください」とおっしゃられたこと。長い間の人と人との出会いと別れから人との関わりの大切さを教わった、自分も決して逃げずにしっかり向き合って行きたい。先生はどんな人ともしっかり向き合い、最後まで関わりをもって付き合っている。自分が今出来ることを精一杯やりたい。「死」という言葉からも逃げず、自分なりにいろいろなことを経験していききたい。

以上、いのちへの新たな認識へと導かれた者、講師の生き方を通して、人としっかり向き合うことの重要性と自分の生き方への見直しなどの気づきが与えられた者が多かった。

IV. 考察

今年で3回目となるこの試みでは、参加する学生が主体的に考え、学び、また、互いに語り合うことを重視したプログラムを展開するよう心がけた。学生が主体的に生と死について考え、話し合うということは、ときに予測できない事態をもたらすかもしれない。しかし、自己の死生観の形成は、他者から与えられた知識を暗記するだけでなく、じっくりと自分自身のあり方を考え、他者の考えに耳を傾けながら、試行錯誤するなかでこそ行われるものである。「死への準備教育 (death education)」を提唱してきた A. デーケン¹⁹⁾は、生と死の教育に関して、「教育とは、教師が自分の持つ知識を、一方的に相手に詰め込むことではないはずだ。…中略…教育の根本的な目標は、人間としていかに生きるか、自分の価値観の基準をどこに据えるかという、いわば、一人ひとりの生き方の基本姿勢を形成するところにある」と述べている¹⁸⁾。参加者一人ひとりの主体的な取り組みの

なかでこそ、「生き方の基本姿勢」は形成されていく。そのような自主的な取り組みの場を作るために、「生と死を考えることを通して、『いのち』の大切さを学ぶ」という目的を設定し、前述の4つの目標を掲げた。

1. 死と向き合う

第一回セッションにより、参加者が現時点でどのような動機や意識をもっているかを知ることができた。生と死についてこれまで自分で考えてきたと答えた学生が3名、周囲の人の死を契機にしてこのプログラムに参加したと答えた学生は17人中4名である。そして、このような死への深い関心から生と死について考えたいという動機とは対照的に、「生と死について深く考えたことがないから参加した」と答えた者もいた。後の質問紙の回答と合わせると、これらの学生のいずれも、ペットの死、身近な人の死を経験して死を意識するようになったと答えており、生と死を考えたことがなかったからという回答は、「死」の現実感が希薄であるというよりも、生と死に関してこれまでの経験を通して疑問に思ったこと、あるいは解決していない複雑な思いや漠然とした問いを自分の中に抱えているということの現われとも解釈することができる。これに関連して、生と死に関して他の人の考えや思いを聞き、意識を変えたい、人に伝えたいという参加理由を述べた者もいたが、自分自身の死生観を十分には確立しきれず、漠然とした思いを抱きながら答えを求めて参加した学生と言えよう。多くの参加者には、一人で生と死を考えるだけでなく、「多くの人と分かち合える普遍的な体験」として語り合いたい、人の言葉に耳を傾けたいという思いが見られる¹⁹⁾。

さらに、保育者を目指す者として、どのようにして子どもたちに生と死について伝えていくか考えたいという回答が複数あった(6名)。そのうち、実習での関わりを通してこの問いを出した学生が2名、病院の院内保育士を目指している学生が1名で、自分自身の死生観を確立するだけでなく、それをいかに伝えていくかという動機をもっていることがうかがえる。しかし、この回答はプログラムの目標③と④のレクチャーを受けた直後であり、教員から同趣旨の問いかけを受けて問題

意識をもったと答えた学生もいることを考えると、この時点での回答には、これら外部からの問かけが影響していることも考えられる。したがって、この動機がどこまで内在化し、自分自身の問題意識となっているかは、続くセッションの中で慎重に見ていかなければならない。

2枚目の質問紙では、「生と死を考える」という主題のうち、特に「死」について問うもので、参加者が死を意識するようになった最初の体験に焦点化した2つの質問を出した。用意したのは、①ペットや小動物の死に関する質問と、②死を意識したときの気持ちときっかけを尋ねる質問である。その結果は、「ある意味で、私たちの人生は喪失体験の連続ともいえる」²⁰⁾という言葉どおり、参加者のほとんどが身近な人の死を経験し、ペットや小動物の死も経験していることを示すものだった。

記述とグループワークの言葉からは、突然訪れる死に、当初は実感がわかなかつたり驚きやショックを覚えた者が多かったことがわかる。親しい人の死の場合には、その事実を受け入れるだけで精一杯だったと答えた学生もいた。当初のショックに続き、「その死が信じられない」といった精神的な否認や、「なぜこんなにいい人が死ぬのか」という不当感、あるいは「もっと一緒に過ごせばよかった」といった後悔の念が浮かび、やがて、時間の経過とともに、喪失感や悲しみとともに楽しかったときの思い出がわいてきたこと、また、ペットの死の場合には、次第に慣れてきて無関心になるなどの変化があったことも語られた。2つの質問に対する回答には、このように、身近に経験した死を受容するプロセスを振り返った内容のものが多い。デーケンには悲嘆のプロセスを精神的打撃と麻痺状態、否認、パニック、怒りと不当感など12段階に分けているが、学生たちの回答は、身近な死を体験してそのプロセスを辿った自分自身の軌跡を述べたものが多かった²¹⁾。元気だった人の死を経験したとき、生と死は表裏一体で、人はいつか必ず死ぬ、という死の普遍性を感じた者もいた。

幼少時の体験からは、「何が起きたかよくわからなかった」が、周囲の人たちの悲嘆に触れて死がもたらす深い悲しみを感じ、幼い友達の事故や火葬や納骨の場面で怖さを感じるなど、死に対す

るタブー感情の形成を振り返る内容のものもあった。その一方、愛着のないペットの死に関心がもてなかったことを報告する者も複数いた。

小動物の捕食の場面を見た学生からは、自然界の生命の営みがつりアリティや「食われる」側の動物の命に思いが及んだ記述が見られたが、自らの命も他の動植物の命によって支えられているという気づきは見られなかった。死の教育は「死」や「殺すことは罪悪」ということにのみ焦点を当てるべきではないという思いを強く感じた。死の教育はやはり幼児期から一貫して行われるべきもので、幼稚園や保育園などで行われる、「ミニトマトの栽培」などは植物に命があること、それを食べることで自分が生かされることを体感させるチャンスである。幼児期のいのちの教育の重要性を知っている保育者であれば意識的に子どもたちに声かけができるのではないだろうか。

2. 死を前にした状況で生の意味を知る

第2回のセッションには、A.デーケンが「死への準備教育」の研究の中で紹介している「大学生のための演習」を取り入れた²²⁾。まず「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」というテーマで小論文を書かせた。熟考した後に記述を始めるなどの注意もA.デーケンの取り組みにしたがって行った。

このセッションでは、記述のあと、絵本の読み聞かせ(D.ブルーナ『ミッフィーのおばあちゃん』(講談社))によって緊張を解き、その後、小グループに分かれて記述した内容をもとに話し合った。

この質問による演習を報告・考察しているデーケンによれば、ほとんどの受講者が「人生最後の時間を使って、自分の生の意義を確認したいという願望」²³⁾を何らかのかたちで表明しているという。今回のプログラムでも、「今までにできなかったことをする」、「自分にしかできないことを探したい」といった答えが非常に多く、思い出作り、起業などにより自分が生きた証を残すなど、積極的に自己の生の意義を追求する姿勢がうかがえた。また、今回のプログラムで目立ったのは、このように生の意義を確認したいという願いがかりでなく、周囲の人への感謝や配慮の言葉が多く出たこ

とだった。ほとんどの学生が、家族や友人など、親しい人とともに過ごすための時間を大事にしたと答えており、他者との関係性の大切さを実感していることが表明されている。最後の半年は感謝を伝えるための時間をもつと答えた者や、残される人、特に両親に宛てて感謝の手紙を書くこと答えた複数の者がおり、グループワークでは多くの学生がそうした言葉に共感する発言をしていた。死を目前にした状況を考えてみたとき、自己中心的な願いばかりではなく、他者への深い関心と出会いの大切さに気づき、その中で自分が生きてきたということに改めて深い意味を見出したのではないか。また、心配や迷惑をかけたくないという言葉のうちには、他者に遠慮するという姿勢ばかりでなく、むしろ、「悲しくふさぎこんでほしくない」などの記述に表れているように、最後の半年を一緒に過ごす周囲の人への配慮や、死後に遺された人たちの悲嘆や苦痛に対する配慮ととらえることができ、死生観の成熟が見てとれる。

上述のデーケンのプログラムでは、「もし半年の命しかなかったら」というテーマとは別に、「残される人に別れの手紙を書く」というテーマの演習も行っている²⁴⁾。両者の結果を比べて、デーケンは、前者のテーマでは「書き手の価値観が論理的に述べられて」いるが、後者では「より感情的で心のこもったものが多い」と述べている²⁵⁾。今回の筆者らのプログラムでは、前者のテーマだけを扱ったが、その中でも「別れの手紙」に言及する記述があり、また、周囲の人への感謝や配慮を表明する言葉が多く出され、学生たちの豊かで深い心情が表現されたといえる。そして、記述だけでなく、グループワークでの話し合いでは、感謝や謝罪をしたい人がたくさんいるという意見が出され、多くの学生に共感をもって受け入れられたことにも注目したい。見守られずに失踪したいと述べていた学生が、対話の中で「見守られたい気もする」と心境の揺れや変化を語っているように、死を前にした状況に身をおいてみたとき、自己中心的な視座から他者に配慮し感謝する視座へと自分自身が転換することを共感的に体験できたと思われる。したがって、グループワークは他者の意見が自己の成長につながることもあり、このような授業においては非常に有効といえる。

しかし、全体的にはやはり「がんという病を得て半年」という意味の重さが理解できず、「いつもと同じ生活をする」ことに意味を見出した学生は少数で、記述の前半は海外旅行の旅程表のように具体的な地名や日数を記入した者が多かった。また、健康体の現在でさえできないようなことを半年でやり遂げることを想像している。これは、この質問がプログラムの前半におかれたこと、そして、「がん」という病が実感できないこと、「痛み」への想像がむずかしいことなどによるものである。鈴木は「死の教育」第5講で、死因、痛み、生命の質、ホスピスなどをキーワードに、がんという病気について、また痛みとの戦いについて語る²⁶⁾。我々のプログラムでは後半に死別体験者の講演が組み込まれている。がんの痛みと戦う6歳の少女の「いたいよー、いたいよー」という言葉、少女の命が輝くときはどんなときだったのかということ聞いた後ではこの課題の答は違うものになったかもしれない。必ずしもリアルに想像して記述する課題ではないが、誕生、死が家庭から遠ざけられたことで、いのちを実感する貴重なチャンスがなくなっていること、プログラム中の課題の配置の難しさを感じた。

3. 自己自身の死生観から保育者としての死生観へ

3・4回目のプログラムでは、参加者自身の死生観および死の経験というテーマから、子どもの死生観の形成というテーマへと視点を変えて、幼児期の死生観の発達への援助について、ダナ・カストロの研究（第3回）および「兵庫・生と死を考える会『生と死の教育』研究会」による研究を中心とした講義を行った。前回までのプログラムで身近な死を受容するプロセスと自分自身の死を考えることを中心に生と死への意識を明確化してきた参加者の多くが、この講義を経て自分なりの答えを見出し、生と死の問題に対して「子どもにいかにか伝えるか」という新しい視点から取り組みはじめた。参加者の感想の記述には、自分が子どものときに身近な人の死に接して理解できず疑問に感じていたことが発達段階の解説に照らして納得できたという言葉があった。また、祖父の死をきっかけに死を怖いと感じた学生からは、幼児期の死生観の確立には悩みながら自分で考えること

が大事だと感じたという言葉とともに、このプログラムが始まった当初よりも死への恐怖がなくなったという感想があった。また、第1回のセッションで飼い犬の死に様々な疑問を感じていることを話した学生は、飼い犬の死への想いを重ねながら、子どもたちが死を理解しつつ戸惑いもあることを知り、大人になっても死に対する戸惑いと不思議さの感じは消えないと言った。子どもの死生観の発達を学ぶことで、自分自身の死生観の確立のプロセスを客観的に理解し、疑問や恐怖心を解決していく学生がいたことは注目に値する。「『死に疑問をもつことは生きることを考えること』²⁷⁾というシントラーの言葉に納得した」と言った学生もいた。

ダナ・カストロの研究および「兵庫・生と死を考える会」の研究を踏まえて2回にわたって行った「児童の死生観の発達」の講義では、参加した学生すべてが、死の絶対性や普遍性の理解がかなり早い年齢でなされることを知り驚いていた。特に、多くの子どもが7歳で死について一定の理解をもっているという調査結果については、ほとんどの者が感想文で言及し、その重要性を認識していた。これは、学生たちが将来、保育者になる者として、この年齢までの子どもたちが現実の経験の中でいかにして生と死の営みに出会い、いかにして「いのち」の大切さやかけがえのなさに気づいていくかが重要であることを認識しはじめたということである。もし諸外国で行われた類似の調査や、わが国で取り組まれた同様の調査研究の結果を知らなければ、保育者となったとき子どもの身近におこる死をどのように教育してよいか戸惑うことだろう。つまり、幼児期を死生観確立前の大切な時期であるにとらえることができれば、幼稚園や保育園で小動物が死んだときなどにも、『眠っている』『みんながいなくなるときになくなった』『星になった』などと死を子どもたちから遠ざけることなく、発達に応じた対処ができるのではないだろうか。また、その死をひとつの「いのちの教育」の機会としてとらえ、意図的な保育を展開することも可能になるのではないか。

また、死の理解に関する7歳以後の変化や、死の絶対性や普遍性理解の一時的低下のように見受けられる「ゆれ」に関しては、「兵庫・生と死を考える会」の調査のみでなく、ピアジェの調査や

岡田の調査においても同様の結果が出ている。これは死ということを知識として「知っている」こととその意味が「わかる」までの時間を要する過程における反応と言われている²⁸⁾。このような知識も、保育者になる学生には伝えていく必要がある。保育者として子どもたちの死生観の健全な発達を支援する目的は、早く正確に死の意味を理解させたり、誤りを指摘することではない。将来、安定した死生観を確立するための「蓄え」²⁹⁾として、身近な出来事などをきっかけに、一人ひとりの発達に合わせた「生と死の教育」をすることである。学生たちの感想文からは、保育者として、子どもたちにいかにして生と死について伝えるか、という問題意識とともに、子どもたちの将来の死生観の確立のための「蓄え」としての「生と死の教育」が保育者に求められているという理解が、このセッションを通じて明確になってきたことがうかがえる。

4. 生と死の絵本を通じて

第3・4回のプログラムでは、子どもに生と死の事実を伝え、いのちの大切さを伝えるための教材として、生と死をテーマにした絵本の解説を行い(第3回)、その後、絵本の紹介と読み聞かせを行った(第3・4回)。保育科の学生を対象とした「生と死を考える試み」では、絵本は受講者に対する教材としてだけでなく、受講者が将来保育者として子どもたちに生と死の意味と現実を伝えるときの教材として紹介するという意図があった。

学生たちは、普段から授業や実習等を通じて多くの絵本に触れているが、これまで「生と死」を考えるという視点から絵本を読むということは皆無だったと述べている。子どもたちにいかにして「生と死」について、「いのち」の大切さについて伝えるかという課題に気づき始めた学生たちにとって、ここで紹介した絵本は、その具体的な手がかりになるものだったと思われる。学生の言葉よると「言葉だけでなく、絵を交えて生と死を伝えることで、子どもたちに受け入れやすい」とあるように、伝えることの重要性をより認識する言葉が得られた。松居は、絵本は物事の見せたいものを虫眼鏡で見るように焦点を絞って見せるものであり、はじめてそれを通して草花や虫の部分を見た

ときの新鮮な驚きに似たものと述べ³⁰⁾、絵本の絵の重要性として「その絵が物語をどれくらい豊かに表現しているかを問題としている」³¹⁾と述べている。生と死という難しいテーマであればあるほど、絵が物語る優れたものを選んでいくことが大切であろう。学生の感想からは、子どもの発達に合ったものを機会を捕らえて読み聞かせ、その時間の共有のなかでいのちについて伝える手段として使いたいという言葉も得られ、絵本は優れた教材のひとつであると理解されたのではないだろうか。ひとりの読者として絵本に感動するだけでなく、将来の保育者として自分の思いや「いのち」の大切さを伝えるために子どもと共有する財産として絵本を見るという視点が、学生たちの間にはっきりと生まれてきているという手ごたえを感じている。

5. いのちを見つめる

第5回のプログラムは、畑野寿子さんを講師にお招きしての講演であった。胎児への語りかけや教会学校での赤ちゃんや子どもたちとの関わり、また、受刑者やガン患者との深い人格的な関わりを通じて、誕生以前から死に直面し、その死を迎えるまでのたくさんの人間の「いのち」の営みに関わってこられた畑野さんの講演は、学生たちの意識と感情に大きな変化をもたらした。

これまで、「死」と向き合い、また「死」を見つめることを通じて「生」を考えることをテーマとしてきた学生たちは、畑野さんの講演を聴いて、生と死の営み全体を貫くかけがえのない「いのち」の尊さに気づいたようである。学生たちの感想からも、そうした変化がうかがえる。人は何のために生きているのか、生の意味などないのではないかと考えていた学生は、講演を聴いてその不安定な気持ちが「吹っ飛び」、「いのち」のかけがえのなさ、その営みのなかで繰り返される人と人との出会いと別れの大切さ、切実さを実感したと述べている。多くの学生が、「生と死」の問題から逃げず、「いのち」の大切さを実感しながら、子どもたちにもそれを伝えていきたいと述べていた。第5回目この講演は、死の意味を問うてきた学生たちにとって、大きな転機となったことが分かる。

宮台宣史は、死について考えることから生の意味についての問いが生まれ、そのような葛藤を通じて、「いのち」の大切さとかけがえのなきの自覚が生まれてくるということを次のように述べている。「生まれて、生きている人間、今、生を営んでいる人間には、遅かれ早かれ、確実に死が訪れる。生きているものは、生きているが故に、死に結びついている。生きつつあることは死につつあることに等しい。死に向かっているものは、生きている。このように生と死は不可分なので、死の意味を問うことは、生の意味を問うことに関わっているとさえよう。」³²⁾ 今回の授業では、畑野さんの講演が、死への問いから生への問いへ、そして「いのち」の尊さの自覚へという学生たちの視点の転換を促した。しかし、それでこの授業の課題がすべて終わったわけではない。宮台は、先の言葉に続けて、「死の意味を問うことから、生の意味を問うとは、どういうことであろうか」³³⁾と述べ、この問いかけには終わりが無いということ、私たち自身の生涯を通じて向き合っていくべき問いであることも示唆している。講演を通じて「いのち」の尊厳と、そこへと関わる人の生き方を知った学生たちにとっても、この授業での経験は、生涯をかけた問いへの第一歩となることであろう。

6. 今後の課題

今回の論文ではプログラム開催時期の都合で第5回までの試みの考察となった。したがって授業の目標3「日々の保育は、子どものいのちに直接かかわる営みであるという自覚を持つ」はプログラムの8回と呼応しているために、「結果」「考察」を述べるができなかった。

今回の授業はこれまでの筆者らの2回の試みを元に作成したものであるが、懸案であった死の定義（脳死、臓器移植とはなどを含む）や今回プログラム中に組み込む予定であった哲学的に見た死、死へのプロセスや悲嘆のプロセスに関する理解などの講義を含むことができなかった。そのため授業全体が、「保育科学生」という対象の特性に偏りすぎたものであったかもしれない。

また、今回はグループワークが、記述内容の発表中心となり、十分に討論する時間が取れなかった。次回は児童虐待、自殺の問題、いじめの問題

などに関し、自由な雰囲気の中でバズセッションを行ったり、人工妊娠中絶、胎児診断など、正解のない、しかしいのちの尊厳と深くかわりのあるテーマをもとにディベートを行ったりすることも考えている^②。ディベートの過程において自主的にテーマに沿った文献を読むことも大きな意味があるだろう。さらに、保育現場においていのちに関する絵本の読み聞かせを行うなどの実習を取り入れることも可能であろう。今後もこの授業の対象者が「保育科学生」であることを意識しつつ、短大生として、成人として、人間として死生観を深めていけるよう支援していきたい。また、すべての過程において学生と共に学ぶ姿勢を大切にしたい。

このような授業は、考察の中で繰り返し述べたように、幼児の保育に関わる者にとって本来必須のものであり、大学の質が問われる時代において、全学的な取り組みへとつながっていくことを希望している。

【文献】

- 1) カール・ベッカー編著『生と死のケアを考える』法蔵館、19-21 頁、2000 年。
- 2) ダナ・カストロ・金塚貞文訳『あなたは、子どもに「死」を教えられますか？—空想の死と現実の死』作品社、2002 年。
- 3) 岡田洋子「子どもの死の概念」『小児看護』11 号、1998 年、1445-1452 頁。
- 4) 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会『幼児・児童の死生観についての発達段階に関する調査』兵庫・生と死を考える会、2003 年。
- 5) 4) に同じ。
- 6) 尾上明子・中根淳子「生と死を考える試み—保育者養成において その 2—」『名古屋柳城短期大学紀要』27 号、2005 年、32 頁。
- 7) 新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム。閲覧日 2006 年 10 月 12 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdo/16/10/04100501/001.htm
- 8) 6) に同じ。
- 9) 工藤真由美「子どもにいのちの大切さ・死の問題を考えるとということ ダナ・カストロを手がかりとして」『四條畷学園短期大学研究論集』37 号、2004 年、50 頁。
- 10) 尾上明子・中根淳子「生と死を考える試み—保育者養成において—」『名古屋柳城短期大学』26 号、2004 年。
- 11) 6) に同じ。
- 12) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波出版、2001 年、170 頁。
- 13) 2) に同じ。
- 14) 6) に同じ。
- 15) 黒木保博他「グループワークの専門技術」中央法規、2001 年、67 頁。
- 16) 2) に同じ。
- 17) 4) に同じ
- 18) 12) に同じ。
- 19) 12) に同じ。67 頁。
- 20) 12) に同じ。122 頁。
- 21) 5) に同じ。61-66 頁。
- 22) A. デーケン『死とどう向き合うか』NHK ライブラリー、1996 年、229-235 頁。
- 23) 22) に同じ。232 頁。
- 24) 22) に同じ。230-238 頁。
- 25) 22) に同じ。235 頁。
- 26) 鈴木康明『生と死から学ぶ デス・スタディーズ入門』北大路書房、1999 年、75-79 頁。
- 27) 茂純子 他「レギーネ・シントラーの『希望へと育む』～要約と解説～、2004 年、43 頁。
- 28) 3) に同じ。
- 29) 27) に同じ。47 頁。
- 30) 松居直『わたしの絵本論』、国土社、1981 年、40-41 頁。
- 31) 30) に同じ。88 頁。
- 33) 宮台宣史編『死の意味：キリスト教の視点から』新教出版社、1994 年、7-8 頁。
- 33) 32) に同じ。8 頁。

② プログラム第 8 回講師鈴木中人氏が行う「いのちの授業」では人工妊娠中絶や胎児診断をテーマにディベートを行い、よい成果をあげている。

保育者養成における生と死の授業

プログラムで使用した絵本（作者・出版年・出版社など）

書名	出版年	文	絵	訳	出版社
ぎゅっ	2000	ジェズ・オールバラ			徳間書店
ママだいすき	2002	まどみちお	まつしませつこ		こぐま社
あやちゃんのうまれた日	1999	浜田桂子			福音館書店
のにつき 野日記	1993	近藤薫美子			アリス館
さよならトンボ	2002	石亀泰郎			文化出版局
葉っぱのフレディ	1998	レオ・バスカーリア		みらいなな	童話屋
おおきな木のおくりもの	1996	アルビン・トレッセルト	アンリ・ソレンセン	中井貴恵	あすなる書房
ミッフィーのおばあちゃん	1997	ディック・ブルーナ		角野栄子	講談社
ずーとずーとだいすきだよ	1988	ハンス・ウィルヘルム			評論社
さよなら エルマおばあさん	2000	大塚敦子			小学館
だいじょうぶだよ、ゾウさん	2005	ローレンス・ブルギヨン	ヴァレリー・ダール	柳田邦男	講談社
「さよなら」っていわせて	1997	ジムとジュリアン・ボウルディン		きたやまあきお	大修館書店
どこにいるの、おじいちゃん？	1999	アメリー・フート	ジャッキー・グライビ	平野卿子	偕成社
レアの星	2003	パトリック・ジルソン	クロード・K・デュボア	野坂悦子	くもん出版
ベッレと二枚のでぶくろ	2003	カーリ・ヴィンイエ	ビビアン・ザール・オルセン	イングリット・アスケ 児玉千晶	イーブック出版
真昼の星	1991	岡本綾子・万里子			いのちのこば社
ダギーへの手紙	1999	E・キューブラー・ロス		アグネス・チャン	偕成出版社
ぼくのいのち	1999	細谷亮太	永井泰子		岩崎書店
ぶたばあちゃん	1995	マーガレット・ワイルド	ロン・ブルックス	今村薫子	あすなる書房

Learning about Life and Death

— Trial Educational Sessions for the Early Childhood —

Onoe, Akiko*

Nakane, Junko*

Murata, Yasuto*

Infants go through an important process of understanding the universality and inevitability of death. Thus, educator of young children must have knowledge about the children's development of the views of life and death. The authors of this paper have conducted the series of educational sessions titled "Exploring Life and Death" twice before, targeting the volunteer students in the ECE at the Ryujo College. This year, based on this experience, we had more number of sessions and tried to inform them about the foregoing studies about children's views of life and death and effectiveness of picture books as teaching materials. The program consisted not only of lectures but also questionnaires and group works so that the students could actively participate. This paper, due to the schedule of the program, discuss about five sessions over nine. Though some students didn't even have any clear purpose of attending the program, they seem to realize that the "education of life and death" as a "stock" for establishing the view of life and death is needed and that one way of this education would be reading various picture books depend on children's developmental stage and their personal experience.

キーワード：保育者養成 (training of early childhood educators), 死生観 (views on life and death), 死への準備教育 (death education), 絵本 (picture books)